

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
創刊平成元年 創刊26年目  
創刊1989年 Nr. 304

## GEKKAN-WIEN 2014年10月号





# 杉本純の原子力の話 II ウィーンと京都 37



九月三日〜五日にかけて、東京大学、上海交通大学、及び韓国科学技術院の主催、IAEA（国際原子力機関）の協力により、原子力安全とシビアアクシデントに関する第二回国際ワークショップが千葉県柏市の三井ガーデンホテル柏の葉において開催された。二〇一二年九月に北京で開催された第一回会合以来である。福島原子力発電所事故を契機に原子力安全への関心が高まったことから、世界の専門家が集まり、原子力安全やシビアアクシデント対策に関するアイデアについて情報交換し、研究成果を共有し、国際協力を強化する機会を提供することが目的である。十一ヶ国から七〇数名の参加があり、うち約半数が外国からの参加であった。十一のセッションで六〇件の報告があった。最終日は、外国からの参加者を中心に福島原子力発電所見学ツアーが実施された。

ワークショップでは、欧州におけるシビアアクシデントに関する新しい研究計画がいくつか紹介されたのが注目されたが、中国、韓国及び我が国における研究も順調に進んでいることが示された。比較的ベテランの参加が多かった第一回会合に比べ、地元東大を始め我が国や中国から多くの若手研究者や学生が参加して発表されたことが

特記されよう。京大の研究成果は筆者の共同研究者により、二日午後に発表され、質問がいくつかあり嬉しかった。会合に参加した各国の研究者と旧交を温めるとともに、現在は韓国浦項工科大学の客員教授を務める、筆者が原子力機構の炉心損傷安全研究室長時のかつての研究仲間と三年半振りでの再会できたのも個人的な特記事項である。

さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市の宮廷音楽隊について述べたい。ウィーンでは夏期の毎週土曜の十一時、宮廷音楽隊が伝統的なブルーのユニフォームに身を包み、旧市街のグララーベムとコロパルクトの角に集合し、伝統的なパフォーマンスの後、王宮正門のミヒャエル門を通過して中庭へと行進する。続いて約四十分



会合参加者

間、ヨハン・シュトラウスやフランツ・レハールなどの作品が演奏される。十二時ごろ再びミヒャエル門を通り歩きながら演奏してグララーベムへ戻る。最後はラデツキー行進曲で締められる。楽器は普通より半音高く調律されているため、音が遠くまで響く。三十五名のメンバーからなる宮廷音楽隊の起源は二七四二年のハプスブルク家のマリア・テレジアに遡る。

一方、我が国には上代から歌や舞があったが、五世紀頃から古代アジア大陸諸国の音楽と舞が中国などから日本に伝わり、雅楽はこれらが融合してできた



芸術で、ほぼ十世紀に完成し、京都の皇室の保護の下に伝承されて来た。大規模な合奏形態で演奏される伝統音楽としては世界最古とされ、高度な芸術的構成をなしている。十月二日に挙行される京都三祭の一つ時代祭では、最後の延暦時代の行列で伝統的な衣装に身を包んだ宮内庁楽部の雅楽隊により優雅に歩きながら演奏される。両市の宮廷音楽隊は、長い歴史に伝統を誇り、皇帝の保護を受けて伝承されるとともに、現在は両市の観光にも大きく貢献していることが共通している。

余談であるが、筆者はウィーン赴任中、宮廷音楽隊の前を何回か通りがかったことがあるが、二百五十年以上の歴史があるとは知らなかった。時代祭は学生時代には機会がなかったが、三年前に観ることができた。雅楽は、三年前に観ることができた。雅楽は、三年前に観ることができた。雅楽は、御所の秋の一般公開でも長女と一緒に楽しんだ。両市の有名な宮廷音楽隊に接することができた幸運に感謝しつつ、王宮を描いたスケッチを掲載させていただく。

■ 杉本純 京都大学教授  
元原子力機構ウィーン事務所長 ■